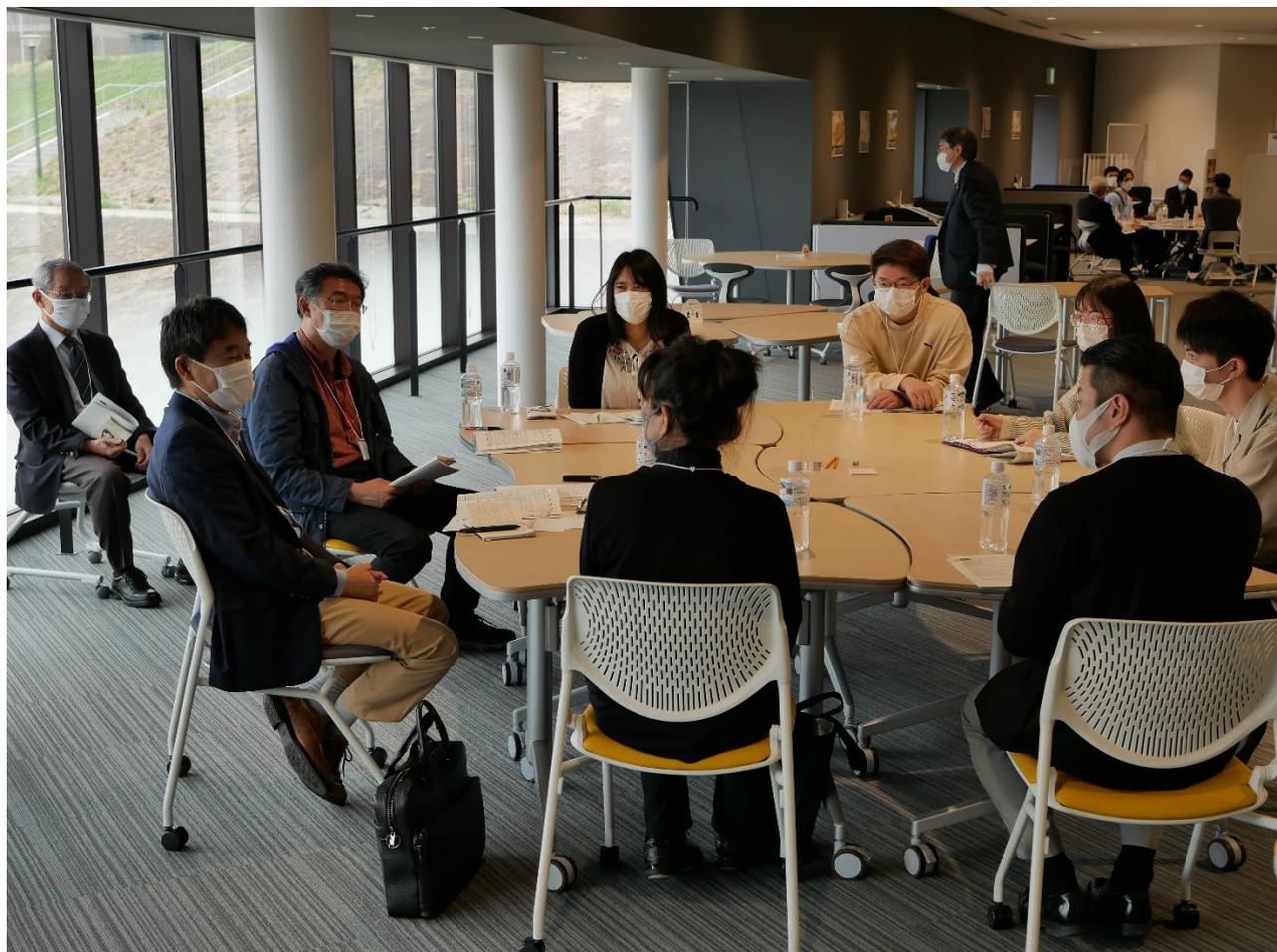


座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ：ペシャワール



進行役： 鐘木政彦 九州大学比較文化研究院教授（政治思想史）・中村哲記念講座担当

参加者： 藤田千代子 PMS 支援室長・ペシャワール会・看護師・元現地ワーカー

佐々木亮 朝日新聞社 記者（当時）

武内厳太 春吉小学校 教諭

岡本偉吹 九州大学共創学部2年・哲縁会

寺田愛理 九州大学大学院生物資源環境科学府修士1年・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会

坂本雄哉 福岡高校2年 ペシャワール班

松木沙和 福岡高校2年 ペシャワール班

座談会コーディネーター： 當眞千賀子 九州大学教授（発達心理学）

記録： 九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された2022年3月当時のものです。

鏑木：せっかくの機会ですので、できるだけ皆さんにお話ししてもらいたいなと思ってます。

ファシリテーターをします鏑木です。よろしくお願いします。

まずは短く簡単に自己紹介をしていただいて。その後、どんな話を聞きたいのかっていう事前の質問もありますけれども、今この場で、何かここで話したいなっていうことを自己紹介のときにもお話しただければ、そうしたものをキャッチして話ができる人に振っていきたいなというふうに思っています。

《自己紹介》

佐々木：じゃあ、私から。朝日新聞の記者の佐々木と申します。

中村さんを最初に取材したのは、ここ（インタビューシート）にも書きましたが、2001年の9月17日、成田空港経由で福岡に帰国されたとき、ちょうど、9.11同時多発テロから1週間足らずの時期ですね。大変恥ずかしいんですが、それまで私、中村さんのこと全く知らなくて。ただ、「こういう人が現地から帰ってくるから誰か空港で捕まえて取材をしてくれ。誰か手が空いてる記者はいるか」って社内でデスクが言ったので、「じゃあ私行ってきます」って言って。空港で、いわゆる出待ちっていうんでしょうか、出てきたところを取材して。当時、KBCと私ともう1社か2社いたと思うんですが、中村さんのそばで話を聞いているその映像が、つい先日KBCの『良心の実弾』にちらっと出てきて、今日いらしている臼井さんから、「これ、佐々木さんだよな？ 若いね」って言われてしまったんですが。

そのときは、まさかこれほど長く取材をさせていただくとは思わなかったんです。

やっぱり、ちょっと短時間、話を聞いたただけだけど、「何か気になるな、あの人の話」っていうことで、講演会を取材したりとか、インタビューをしたりしまして。聞けば聞くほど、何だか気になるなっていうふうなのが深まって行ってですね。ここ（インタビューシート）にも書きましたけど。もちろん、アフガニスタン情勢ですとか、ペシャワールのこととかお話しされているんですが、それに留まらない、何かすごく、一言で説明するのは難しいんですけど、何かもっと大事なことを話されてるなっていうのでですね。座標軸というか、北極星みたいな存在としてずっと話を聞いてきまして。

新聞記者というのは転勤族ですので、途中、ちょっと福岡県外に行ったり他のポストに就いたりしてブランクはあるんですけど。ですから、亡くなるまでの18年間のうち13年くらいは取材をさせていただいて。私、間もなく新聞記者やって丸34年に近づくんですが、恐らく新聞記者人生の半分くらいは中村さんの話を聞き続けて、結果的に最も長く取材をさせていただいた人だった。でも最初のきっかけのときは、本当に恥ずかしい話ですけど、これほど長いお付き合いになるとは思わなかったっていうんでしょうか。ちょっとずつの取材を積み重ねているうちに、気が付いたらそれだけの時間がたってたっていうことです。またほかの話もしようと思います。

よろしくお願いします。

鏑木：ありがとうございます。「簡単に自己紹介」って言ったけど、簡単じゃなくていいです。

佐々木：すみません。



鏑木 : 皆さんの思っていることをちょっとここでまずは。

もちろん、結果として短くても長くてもそれは構いませんので。じゃあ、寺田さん。

寺田 : はい。九州大学大学院の、今、修士1年の寺田愛理といます。専攻は農学部といますか、一番奥(の農学部棟)で森林、林業の研究をしています。中村先生を初めて知ったのは、大学1年生の講義のときに政治学の岡崎先生の授業の中で、中村哲先生のことをトピックスで取りあげられた回があって。正直、他の回の授業はとても難しくあまり分からなかったんですけど、やっぱり、そのとき先生のお話を初めて知ってすごく衝撃を受けまして。それからご縁がいろいろありまして、ここにも参加している学生団体の先輩のご縁とかでペシャワール会の方のイベントを聞いたりとか。医学部キャンパスに哲先生が講演にいらっしゃったときに、実際、直接生でお声を伺うことができたりっていうことで、ほそぼそと関心は寄せておったんですけど、この、『中村哲先生の想いを繋ぐ会』があったときに裏方として参加させていただいたりとか、昨年、講義のときはティーチングアシスタントとして参加させていただいたという感じで今に至ります。はい、大体そんな感じです。よろしく願いいたします。

岡本 : 僕は九州大学の共創学部の2年生、次は3年生の、岡本偉吹といます。(中村哲先生のごことは)亡くなられたときに初めて知って。そのときは高校3年生のちょうど12月で、もうすぐ入試だったときに、自分が、そのときは国際協力みたいなどころに行きたかったときに、初めて知ったときになかなか頭からそのニュースが離れなくて、結局、高校の先生とかにもいろいろ聞いたりしてたのを、何かすごく今、覚えています。

中村先生が亡くなられて初めて知って、また、ちょっと入試があって関心が薄れちゃって。九州大学に入った後で、中村先生が九大出身だということを知って。九大と聞くまでは、西南学院大学出身だと思って。きょう来られている飯嶋先生の少人数セミナーっていう授業の中で中村先生の本を読む機会があって。その中で、ニュースで知っていたのは中村先生の、うわべだけっていうか。本を読んで深い部分を知っていったところから、何か、国際情勢を他の角度から見ると目を与えてくれたような気がして。これからも勉強していきたいなって思ったときに、そこのメモリアルアーカイブの言葉選定の機会をいただいて、そこで言葉を選んできました。今は、野中さんとかと一緒に学生団体で「哲縁会(てつえんかい)」っていうのをやっています。よろしく願いします。

松木 : 福岡高校から来ました松木沙和といます。

私が初めて中村哲さんを知ったのは、福岡高校に入学して、生徒会活動があるんですけど、生徒会活動がしたくて、どうしようかなって考えてたときに、一つの委員会に入って。この(渉外)委員会の中の仕事として毎年文化祭で中村哲さんのことを展示するっていうのがあったんですけど、それが自分の仕事として回ってきたときに、ああ、こういうのがあるんだなって思ってペシャワール会に行ってみたりとかする中で中村哲さんを知っていったんです。「ペシャワール班」っていうのを昨年の夏立ち上げて、それは、福岡高校にこんな偉大な先輩がいるのにあんまりみんなに知られていないからっていうので、やっぱり私たちも中村哲さんの思いを受け継いで、私たちも知って伝えていこうっていう思いで始めたんですけど。最近、アンケートで、「ペシャワール班についてどうですか？」みたいななの



を取ったときに、あんまりよく…。

思ってくれてる人は思ってくれてたんですけど、何をしているのか分からないとかってというのがちょこちょこ聞かれて。同級生とかに伝えていくときに私たちが考えていることがなかなか思うように伝わらないことが多いので、そういう、同世代に伝えるときにどのようにして伝えていったらいいのかなってというのが最近思っていることであります。よろしくお願いします。

坂本：福岡高校から来ました坂本雄哉と申します。

中村先生のことは、ニュースで、中村先生がお亡くなりになられたってところで初めて知って。そのときは、アフガニスタンで医療に従事している方ってということだけしか知らなくて。さっきお話、松木さんがお話しになったと思うんですけど、ペシャワール班っていうのを校内で立ち上げたときに中村先生のことをニュースとかを見て知って。医療活動だけじゃなくて、井戸掘りを行ったりとか用水路を建設したりとか、ちょっと言葉はあれかもしれないんですけど、医師らしからぬ行動といいますか、というのを行ってきて、本当にすごいなって感心して。

そんな方が母校、自分がいる高校をご卒業になられているってということで、狭い範囲ですけど、高校の中だけでもより多くの人に中村先生のことを知ってもらいたい。知って、何か受け継いでいけるものがあればと思って、今ペシャワール班で校内で展示を行ったりとか、今日、講演会をオンラインで行うんですけど、そういうのを通して、できるだけ多くの人に中村先生のことを知ってもらいたいと思って、今活動しています。本日はお願いします。

武内：春吉小学校の武内厳太です。今日はよろしくお願いいたします。

僕が知ったきっかけは、もともと出身が下関、山口なんですけれども、福岡に大学から来て、春吉小学校に赴任したときにペシャワール会が近くにあるってことを知っていたんですけど、僕も深くは、正直、知っていません。

中村哲さんが亡くなったときに、いろんな報道を見て、すごく、何か最初分からなかったですけど、何でか引かれたんですよ、すごく。引かれて、1週間後にもう道徳で教材化しようってということで自分でひたすら家で調べまくって、ビールも飲みながら、ひたすらもう、ひたすら調べて。そしたらどんどん楽しくなってきて。最初、道徳科を1週間後にしたってということで。その後、2年連続、今、6年生を担当させていただいているので。教科書も改訂されて中村哲さんも国際協力のところにたまたま入ってきたのでそこでもっとピックアップしてその単元を広げられないかな？ていうのがきっかけで今に至っています。

あと、印象に残っている言葉で、「希望を守り育てるべき」っていうので。やっぱり、守る、守るってイメージがあるんですけど、育てるっていう感覚ってというのは今まで当たり前にあったようなものだったんですけど、意外と自分の感覚になかったのかなと思って。今、例えば、小学校のなりたい職業ランキングももうランク外になってる状況で。やっぱり僕も見てて思うんですけど、先生たちが疲弊している。自分もその1人なんですけど。やっぱり子どもたちに魅力に映らない職業。でもその職業が未来を担っていく子どもたちを育てるのにこのままでいいのかなっていうので、そのきっかけで中村哲さんをピックアップした、そして今に至るってところが現状です。



僕、本当に、熱しやすく冷めやすいタイプなんです。本当、大学時代からいろんなものに手を付けては辞めて。サーフィンかっこいい、溺れかけて辞めるという。だから中村哲さんはすごい本当に引かれたんだろうなって、ずっと今までもいろんなものを見たり勉強させていただいております。今日はよろしく願いいたします。

藤田：皆さんこんにちは、藤田と申します。

私はナースなんですけれども、日本で中村先生の講演を聴いて。その頃の中村先生はパキスタンのペシャワールのミッションホスピタルという所でハンセン病の診療をしてありました。現地のイスラム教国というのがありますが、長い長い培われた文化の中で女性が男性に肌を見せないという、近親者にしか肌を見せないっていうのがありまして。ハンセン病は皮ふの症状から現れるので、なかなか女性の服をこう、剥ぐって皮膚の検査をできないというので女性の働き手をというところで、その話を聞いた2年後にペシャワールに行きました。

それからいろんな、本当にたくさんのお出来事があったんですけれども、アフガンの難民との出会いとか、あとその医療過疎地、パキスタンもアフガニスタンも医療過疎地だけで、ハンセン病だけじゃなくて他の病気も治療できてないという、そういう状況の中で両国に診療所をつくっていこうということで、そういうものから。あと、アフガニスタンのほうがそのうちに干ばつになったりして井戸掘りをせないかんっていうことで、当時はアフガニスタン、本当に、干ばつで何もなかった。全部、資機材とか、ペシャワールのほうで準備しなきゃいけなかったために、その3年後に用水路をいよいよ掘り始めるんですけれども、そのときにも重機とかですね、掘削機とかブルドーザーとか土のうまでペシャワールのほうで買い付けなきゃいけなかった。一時は工務店で働いているような感じで。とにかく、現地に行ったら、何でも、医者もナースも事務職の人も、何でもしないとイケないという柔軟さが求められました。

今、中村先生がいなくなられて思うのは、何でもさせてもらっていて良かったなということを感じております。一つ思うのは、最近中村先生のことをよく話したりする機会があるんですけれども、中村先生としては、まずは、「あんたがわしのことを話すのか？」ということに笑ってるんじゃないかなということと、もう一つは、中村先生ご自身が亡くなられた後、この、全国でこんな取りあげられているということに恥ずかしい思いしているだろうな、とか。決して「自分が、何かを成し遂げたぞ」って言われる方ではなかった。ちょっとキョトンとしてあるんじゃない？「この動きは何だ？」って思いながらキョトンってしてるんじゃないかなとか思いながらこの2年半ですか、過ごしておりました。

しかし、あまりにも「すごいことをなされた」とか言われると、特に小学校の子どもたちとか、中学生もそうですけど、取っ付きにくい。あまりにも偉大な人っていうふうにされてるところがあって。本当に私はすごく近くにすぎたせいか、そうですね、現地滞在のうちの、先生と一緒に仕事を何でも話し合いながらやってきたので、何か、半分くらいは私は怒り、怒ってました。よくけんかもしました。けんかもっていうのは、今は「協議」というそうですね。協議をしながら、しばしば腹をたてておりました。だからもっと身近な等身大の先生を知ってほしいなっていうところもあります。

今日はどうぞよろしく願いいたします。



鏑木 :ありがとうございます。今、一通り、ざっとお話ししていただいて、いろんな興味や関心が刺激されたんじゃないのかなと思います。もう、自然に、聞きたいことを聞いてもらってもいいかなと思っているんですけども。

一つは、今、聞いてて思ったことは、高校生や大学生の立場で中村先生のことを伝えていこうというときに、どうしたらいいのかなっていう、それぞれの場所での戸惑いというか、問題。そういったところに、もしも何か思うことがあればいろいろアドバイスなり感じることを伝えてもらえたらいいかなと思っています。

あと、それ以外に、やっぱり、それぞれがやはり中村先生に触れられて、関わって、こんな長い付き合いになるとは思わなかった、こんな飽きっぽいのにあんなやれるとは思わなかったっていう。きっとまたそこは掘りだせばもっといろいろとお話したいこともあるのかなと。特に藤田さんには等身大の中村先生のお話をやっぱりいろいろ聞きたいなという気持ちがあります。

今、ざっとお話を聞いて、こんなこと、話ができたらいいいのかなっていうことを取り出してみました。まずは中村先生についてもうちょっといろんな話、立場で知ったこと、あるいは関心持ったことを話してもらって、その後に、どんなふうに伝えたらいいんだろうかっていうような話に持っていきないうふうになっています。

ということで、私のほうで勝手に流れを決めてしまっていますが、あの、もしも話したいことがあれば、自由に違う流れで話をしても、構いません。ということで、少し順番を変えまして、では、飽きっぽい武内さんに、もう少し「中村先生のスピリット」っていうところで自分が感じるところを、ご自由にうちちょっとお話しいただきたいなと思います。

《中村先生が伝える現地、等身大の中村先生—意外とぶきっちょ》

武内 :飽きやすい武内です。飽きやすい武内なんですけど、なんで飽きやすいのに飽きなかったか。

シンプルに、かっこいいなっていう一言ですね。

僕、本当、いろいろすごい迷ったら、迷って、迷って、プラスしていくのはすごい簡単なんですけど、大事なものをそぎ落としていく。授業をとってもそうなんですけど、膨大な学びの中から何を大切なところとしてピックアップしていくのかっていうのを考えたときに、すごい悩むんですよね。僕もいろいろ、まだまだ若いんですけど、悩むこともありまして。そのときには、かっこいいか格好悪いかっていう、すごいシンプルな考え方に、もう、最終的にはなっていくんですよ。

中村哲さんの、僕は『ニホンオオカミと呼ばれた』っていう新聞(*注6)とかも見たりとかして。国会の中でいろんな議員さんがいる中で、簡単に言うと、「あなたたちは現場を知らないんだ」、「今、現場の現状はこうなんだ」っていうのをバンツて言われたときに、国会の人たちからすごいいろんな批判を受けるんですね、やはり。それでも伝え続けるだけの、ただ言うだけじゃないっていう。

*注6:【中村哲という生き方】(中)ニホンオオカミと呼ばれ(2020-01-03, 西日本新聞)

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/573015/>

西日本新聞社の中村哲医師特別サイト「一隅を照らす」から公開されている



僕、そこ（インタビューシート）にちょっと書かせていただいているんですけども、信念を貫くだけの思いと、力を付けている。何かそんなに真っすぐな目と心で伝えられる、このご時世ってなかなか難しいじゃないですか。いろんなしがらみ、教育界もそうなんですけど。例えば宗教問題だったりとか政治とかももちろんタブーですし。でもやっぱり中村哲先生の話をする中でやっぱり政治的な発言だったりとかをどう扱うかっていうのもそうなんですけど。何て伝えようかまとまってないんですけど、エネルギー、覚悟、言いづらいところもあるんですけど、強さと今必要な思いやり。

先ほど藤田さんがおっしゃられた、等身大の中村哲さんっていうので子どもたちも事務所にちょっとお邪魔させていただいたときに、藤田さんが「本当ぶきっちゃよで、いつも縫い目もきれいとかじゃない」とかっていう話をして。（一同：笑い声）

子どもたちが、今まで遠い存在だったのが、すごく、自分たちの身近な存在として落ちてきたんですよね。さっき話されていた、同級生にどう伝えるかっていうところにもつながるんですけど、やっぱり一番初めの取っ掛かりは、興味、関心をどう引かせるかだと思うんですよね。子どもたちで言ったら、教えたことと自分の立場を、ギャップを埋めてあげる。最初にそれをするかしないかで伝わり方っていうのは変わるのかなって思います。すみません、ちょっとまとまってないですが。

鐘木：いえいえ、全然。

武内：すみません。よろしくお願いします。以上です。

鐘木：まともりは全然必要ないと思いますので。思ってることが、ポツポツと出てくるだけでいいと思います。もしもその場で聞きたいことがあればすぐに自由に発言してもいいですが、どうですか。よろしいですか。「縫い目もきれいじゃない」とっていうのは何の？

藤田：オペの。

鐘木：オペの？

藤田：はい。ハンセン病の患者さんたちの手術。大きいいになると脚の切断とかもあるんですけど、この、縫うのは、私のほうがすごく上手でした。（一同：笑い声）

縫う、それが、いろんなところを縫うんですけど、結構ぶきっちゃよで。オペの道具とかも足元に落として。あるときはメスが私の足の親指とそのとなりの指の間にストーンと落ちたり、とか。大変ぶきっちゃよでいらしたんですけど、しかしまあ、その目的は果たすと。目が閉じることができるよう。ハンセン病の患者さん、こころの神経がやられてですね、目が閉じれなくなったり、脚をこう、持ち上げることができなかつたりするんですけど、そういうのをもう一回、目が閉じられるようにするとか、脚が持ち上げられるようにこういう手術をするんですけど、その、下手なんですけど不器用なんですけど、しっかりその技術は学んで目的は果たすんですよ。なので、目を閉じられるようになる手術も少し自分たちの手でどのぐらい閉じれるようになるかを調整してここで結ぶんですけどね。それがあまりにもき



ついと、目が、通常こうなるんですね。しかし閉じれるようになって失明は免れるという。

そういう患者さんたちが来たら、もうすっかり自分がオベしたっていうのを忘れて、「きみ、これは閉め過ぎじゃないか！」って怒るので。(一同：笑い声)

「どの医者が手術したんだ？どこで？」とかって言って。

でも私たちは覚えているので、みんな、もう、でも、先生は偉い先生なので、みんな、笑えないんですよ。私が先に笑って、みんなの苦痛を。(一同：笑い声)

藤田：そんな、ぶきっちょなんだけども目的をきちっと果たすという。それがいろんなその後が始まる事業の中で生かされてました。なので、現地に来た日本人のワーカーたちもたくさんいましたけれども、現地の職員も割とそういうところでは親しみを感じるというのがありました。

鎌木：ありがとうございます。佐々木さん、先ほど「取材していてもっと大事なことを話しているんじゃないか」と。そこをもう少しお話しただけじゃないですか。

《中村先生との出会い—自分の座標軸が変化する》

佐々木：最初は本当にちょうど9.11、それから米軍の空爆が迫るっていうタイミングで取材したので、「現地はどうなっていますか」みたいな話を聞いていたんですけど。こちらが今、目の前に起きていることを聞こうとすると、もう少し長い視野とか時間軸とか空間でお話しされたりとか、して。特にやっぱり、私、その当時、アフガニスタン、パキスタンに詳しくなかったわけですから、そうするとやっぱりアメリカから出てきた情報中心でそれを理解していたんですけど。「あ、現地側から見ると世の中ってこういうふうに見えるのか」みたいな、ある意味で、聖書の言葉ですけど「目から鱗が落ちる」みたいなね。西側というかアメリカ側に振れていた自分の座標がギュッと矯正されていくというか、修正されていくみたいな。あるいは日本から見ていたけど日本の外から見ると違って見えるみたいな、そういうのを覚えてですね。そういうのを繰り返しているうちに、やっぱり、本も読んだりして。こちらはでも、どうしても報道ですから、「今、現地の活動はどうなってますか」とか、「今、アフガニスタンはどうなってますか」ということを聞いて記事にすることが多いんですけども、その記事の外側にももう少し長い視野や広い視野でお話ししていただいたり、あるいは、こっち側の見方だけじゃなくて、向こうから見ると世界はこう見えるんだみたいなことを教わったりしてですね。

私も、このアンケートにも書いたんですけど、メディアの宿命というか、新聞だとページの広さ、テレビだと時間とかで、多分、聞いたことの10分の1とか、何十分の1くらいしか記事にできなくて。しかもさっき言ったように、「今はどうなってますか」ということを中心に書いてきたので、そこを書ききれなかったなっていうふうな、自分の筆力のなさみたいなものもあるし。逆に、書ききれなかったなと思うから、また行って聞かなきゃ、みたいなね。やっぱり、何回でも行って。例えば、「今どうなってますか」というのも、2001年はこうなっています、2002年はこうなっています、2003年はこうなっていますって言って、それをずうっと続けていくことでもう少し長い、変化っていうんでしょうか、ちょっとずつの変化かもしれないけれど。



例えば、2001年当時は用水路は全く、2001年の9月の段階で用水路の話なんてほとんど、もしかしたら考えてたかもしれないですけど、外には出てなかった。初めて私が用水路の話聞くのは2002年の春か初夏ぐらいだったと思うんですけど、やっぱりそういうふうに、ああ、まだ全部書けないなと思って。あるいは、まだ全部聞けていないなと思って何回もインタビューしたり講演会行ったりしているうちに、だいぶ書けた、でもやっぱり全部伝えきれなかったな、みたいなのをやっていたら、気が付いたら18年追いかけてみたい感じですね。何か聞いても聞いても、書いても書いても、まだまだ、まだまだみたいな、ずっと続いたみたいなどころがありますね、すごく。

ただそれはさっき申し上げたメディアの宿命で。例えば、1冊の長い本とかだったら相当書き込めたり完結できたかもしれないんですけど、やはりどうしても新聞、それからテレビとかネットもほぼそうだと思うんですけど、一つはやっぱり、今起きてることはどうですかっていうことに軸足を置きがちなのと、もう一つは、物理的やら時間的やらな制約で、聞いたことのうちやっぱり優先順位を付けてニュース判断をして、なおかつその枠に収まるように報道しなきゃいけないっていうのとでやっぱりそれとも悩みながら、悩んで、答え出ないで、じゃあまた日本帰ってきているそうだから話を聞きに行こうみたいなことを繰り返してきたって感じです。

藤田：あの、全然違う話ですけど、中村先生が亡くなる年の2019年にもあれでしたよね。「これから中村先生のことを書きます」っておっしゃって、都久志会館の。（*注7）

佐々木：そうです。楽屋で。

藤田：はい、講演会場の都久志会館の控室で打ち合わせをしてあって。そんなら、あんまり時間が取れなかったんで、そしてそのときは、自分が原稿書くのはいやだとか、中村先生はちょっときついから、それは、「自分が書くんだっいたらいやだ」とかおっしゃって。佐々木さんが「自分で先生の話を取材して書きますから」って言って。時間がなかなか取れないので、帰国したときに関西空港とかから移動する間にじゃあ取材をしてもらおうかっていうことで話が決まったんでしたよね。

佐々木：そうです。

藤田：その後、1回も、だから、結局できなかつたんですよ。

佐々木：そう。そのときは実はうちの社内で中村さんの評伝っていうんでしょうか、ライフヒストリーを連載するっていう企画がやっと通って。ペシャワール会を通じて中村さんをお願いして、ちょうど都久志会館の楽屋で、「それは私が書くんですか」、「いやいや、聞いて書きますから」、「だったらいいですよ」という話になって、ゴーサインもらったんで、いつから始めましょうかって話になったときに、これ、本当に痛恨なんですけど、「じゃあ取材入る前にもう一度、本とかを全部洗いざらい読んで頭に

*注7：2019年9月2日、都久志会館（福岡県福岡市）で行われた講演

入ってから聞きたい」とお願いした。取材については、例えば関西空港から福岡。中村さん、国内移動は大体、新幹線使われていたんですね。

藤田　：新幹線。

佐々木：ね。東京からでも新幹線を使われていたので。そうすると例えば、東京を往復したらそれだけで10時間くらいインタビュー取れるだろうとか、関西空港を往復したらそれだけで5、6時間インタビュー取れるだろうっていった、そういうのを何回か。その前に御著作を全部というか、手に入るだけ読んでから、準備してからって言ったのが2019年の9月で。

3カ月くらいかけて本を読んでたらあの事件が起こって、藤田さんに告別式でね、「佐々木さん、残念。約束ができなかったね」って言われたときに、僕も痛恨のね。なんであと1年早く準備を始めなかったんだろうとか、なんで、本は後から読みますから先にお話を聞かせてくださいってやらなかったんだろうとか。ただ、準備なしで臨むのも失礼かなという判断も当時あったんですけど、まさか、しかもあんな事件が起こるなんて想像もしてなくて。その約束がやっぱり果たせなかったのが自分にとっては痛恨ですから、違う形でその約束は、果たしていかなきゃいけないんだろうとは思いつつ。これからやっぱりきちんと自分が聞いたり見たりしてきたこと、あるいは追加で周囲の方を取材して。

でも、せっかく約束を取り付けたのにそれが実現できなかったっていうのは、もう、本当に悔やんでも悔やみきれない。ちょっと、それ、すみません、話が横道にそれました。

眞　：(座談の時間延長のアナウンス) Enjoy yourself、どうぞ楽しんでください。

鏑木　：いえ、横道じゃないと思います。

鏑木　：本当、だけど、そういうことがあったんだっていうのを知っただけで、僕はすごく、何か今胸がいっぱいです。等身大の中村先生を。僕は、生前は2回講演会を聞いただけで、直接お話をしたことはありませんので。福岡に2000年来て、ペシャワール会を知って、すごいなというふうに思っていて。例えば、僕の知り合いは、講演の後に行ってですね、何か中村先生と話をしに来るんですけど、僕はちょっと何かそういうお話しするような勇気もなくというか、遠くで見ているだけでいいかなと思ってたんですよ。まさかこんなことになるとは思ってなくて。

本当は、僕個人は、そういうものをどんなふうに伝えていけばいいのかって思ったときに、それぞれの立ち位置、親しい関係のものもあれば、ペシャワール会の働きを見て、感じることを伝えるようなこともあるだろうし、いろんな関わりがあるだろうと。そういう中で距離を持ちながら、しかし…、そうですよ、佐々木さんが座標軸っていう表現を使ってくれて、僕、本当にそうだなって感じていました。中村先生、ペシャワール会の活動がこういうふうにあるっていう、それに対してそこから見たとき、僕は何をしているのかなっていうのを考えながら参考にさせていただいているという、何かのためっていうより僕自身のためにやっているっていうようなところがあってですね。

ちょっと話がもう混乱しているんですけども、だから、等身大の中村先生の話っていうのは僕にとっ



ては全然知らない裏側の部分なんですけど、それを知ること、さっき、どんなふうに伝えていけばいいのかって言ったときのいろんなヒントがあるような気がしました。

それで、いろんな見え方があって、本来であればもっと聞きたいことがたくさんあった、調べたいことがいろいろあったということだと思んですけども、どうなんでしょうか。さっき手術のお話ありましたが、それ以外にも等身大の中村哲先生で、何かこんなところがあったんですよっていうふうに、若い人にお話しするとしたら？

《中村先生と働く—お話し好きで質問を楽しみにしていた中村先生》

藤田：何か聞きたいことって。中村先生、私、（インタビューシートに）書いたと思うんですけど、物忘れがひどいとか、同じことを何回も言うとか、結構、中村先生と働くときの難しさと言いましょるか、朝おっしゃったことと夕方おっしゃることが随分違うときがあったり。それは勘違いが多いというふうに私は書いているんですけども。

私も一緒に仕事を始めて2年間は、黙ってたんです。いや、私の勘違いだろうかとか、先生のおっしゃる通りにしとったほうがいいとか、思ったんですけど、2年過ぎたときに1回、日本に帰国したときにペシャワール会の方に相談したんですね、あんまりにも多いから。

そしたら、「それはやっぱり率直に先生と話したほうがいいよ」と言われてから、気楽に。「先生、それは朝はこういう指示でしたよね？」って言ったら、「僕、そんなこと言ったかね？」って言って、すぐに自分を変えられる方だったんです。それがもっと大きなことになって、良く言うと「協議」ですね。悪く言うとけんか腰になって言うと、中村先生は、『論語』にあるんですかね、「君子は豹変す」とか、何かそんな言葉でやり返してきたりとかされるんですよ。

しかし、中村先生に、私が気楽にいろんなことを言えるようになったのは、ちゃんと聞く耳を持ってあるんですね。私たちの年齢を重ねていくと、何か年下の人にいろいろ言われたらカチンときたり、なにくそか思ったりするんですよ。しかしちゃんと聞いて、「自分の言うたことはそういう意味じゃなかったんやけどね」とか、「あら、言い間違うとったね」とか、「あ、ごめんごめん」とか言って、次の仕事にそれを必ず生かしてくださってた。だから、ちゃんと聞いてくださってるなというふうにこっちも理解するわけですよ。だからやっぱり腹を立てて、私はよく本当に「目をそんなつり上げて言わんで」とか先生によく言われるぐらいカチンときてたんですけども、腹を立てることなく、きちんと中村先生に伝えれば聞いてくださってるなっていうのはありました。

佐々木さんは取材する側だったのでよくお分かりかと思いますが、中村先生結構話好きなんです。無口だということに通ってるみたいですけど。私さっき、鏑木先生のお話を伺って思ったのは、ああ、もったいないことなされたなって。

講演に行ったときも、とにかく、この活動は長かったし、中村先生本人はいろんなことを話したい、いろんなことを知ってほしい、いろんなことを伝えたいと思っていらしたので、とにかく質問がお好きでした。私は日本に帰国して、後は中村先生の講演会にずっとついて、かばん持ちと言ってもかばんは持ってなかったんですけど、ついていったんですよ。そのときに「質問が出なかったら、あんたが質問しなさい」とか言って、「はい」って、質問。（一同：笑い声）



藤田 : はい。そのぐらいお好きでしたので、もったいないことなされたなと感じました。

というのは、本当に、怒るときは怒るし。現地の人にも、暴力は絶対に振るいませんでしたが。うちには、今はアフガン人ですけど、(当時は) パキスタン人、アフガン人で半々、それに日本人が混じって働いていましたので、いろんな民族が出てきたり、宗教的な問題が出てきたり、日本人の私たちが言ってることに対する問題が出てきたりするんです。

けれども、朝礼とかで話をして、よく、「あそこの山の雪を見てごらん」と。「あんたたちアフガン人が見て黄色く見えるか? 黒く見えるか? 山の雪は誰が見ても白いんだ」とか、「顕微鏡を見てこの菌を見たときに、これをアフガン人の菌だとかパキスタン人の菌だとかそういうことは見分けは付かないだろう? だからみんなで仲良く仕事をしなさい」というふうに、分かりやすい言葉で。本当に簡単な言葉で、けっこう説得力もあることを話してありました。

しかしそれが、朝礼のときとか終礼のときなんですけど、ウルドゥー語、これはパキスタンの公用語です。パシュトゥ語、これはパキスタン、アフガニスタンで使われている言葉。アフガニスタンだけで使われているダリー語っていうのがあるんですけど、この三つの言葉が入り交じって、そうやって話をされるので、なんか、みんなは聞いてて最後は笑ってしまうという。また先生言葉が混じってる～っていう感じでね、何ともおちゃめなところもあるし。怒ったら大変怖い面もありましたけども。中村先生が一貫していたのは、自分も口で言ったら自分もそれを実行するという強いところがありましたね。失敗例はいろいろありますけど、そこら辺でいいんじゃないでしょうか。

鎌木 : ありがとうございます。皆さん、もったいないことがないように、今、いろんなことを聞いてくれたらいいかなあとと思います。どうぞ。

松木 : 藤田さんがアフガニスタンに行かれた当時って、日本から見るとアフガニスタンとかってどういうような? 今だとタリバンが、とかっていうイメージがあると思うんですけど、当時はどういうイメージを持たれてたんですか。

藤田 : 私は知りませんでした、アフガニスタンという国がどういう国なのか、パキスタンっていう国がどういう国なのかっていうのを全く知らないで、ただ求められるままに飛び込んだ感じだったので、知らなくて。

しかし、日本からパキスタンに。まずペシャワールに行くんですけど。そのときに中村先生に言われたのは、やっぱり、自分では意識してなくても、私は支援に行った側の人間なんですね。そして支援に行った側の人間だから、何もかも日本のものが一番だと思ってたんです。日本のものが一番いいというふうに思って現地に行くと、何でも、腹が立つくらい、そうならないんですね。

よく腹も立てたし、「もう私はここでは働けん!」って言って飛んで帰ってきたこともあるんですけども、そのときに中村先生が、何かいつもの話、普段に話してることで言っていたのは、「日本のほうが異常なことはあるんだ」というのを結構言っていたんですよ。その目で見るとですね、現地は本当、腸チフスとか結核とかマラリアとか。腸チフスとか言ったら、日本の方はすごく恐れますけど、現地は普通の病気なんですよ。診断さえ付いてちゃんと治療すれば確実に治る。しかし、診断が付かないで遅れ



てしまうと子どもはもうバタバタと死んでしまう、という感じなんですけれども。そういう環境の中にあって、ハエもいっぱい。腸チフスの菌の媒体になるんですけど、それがいて、感染したりすることもあるんですけどね。そういう所から日本を見ると、あまりにも潔癖すぎて、そのうちに、日本からこんな送られてきたボールペンに「抗菌」って書いてあって、何だこれは？と思って。(一同：笑い声)あまりにもきれいになりすぎたりとか、それはやっぱり現地から見るとすごく異質に感じる場所もありました。

他の報道のこととかも、タリバン政権、私は日本にいなかったんですけど、日本から帰ってくる中村先生が、「タリバンたちがえらいたたかれようよ」って言われて、私たちは、なんでしょう、ベツタリはしてませんでした。タリバン政権のときはタリバン政権のルールに従ってアフガニスタンで活動していたので、別に、すごい貧しい人たちのことを考える人たちだったので、そのルールに従ってさえいけば安全に仕事ができるわけです。

で、この報道の違いは何だろうかとか、今のウクライナのこともありますけど、タリバン政権に去年政変したときのことも考えると、やっぱり中村先生のおっしゃってたことは正しいなど。正しいというのは、そういう目で今の日本を見て、日本が全く正しいのかとか、報道は正しいのかとか、そういうことをやっぱりすんなり受け入れるんじゃないくて、この自分の目でとか、自分の頭で考えながら、これが悪い、これがいいっていうふうに決着つけるんじゃないくて、そういうこのやわらかい頭で見ていく必要があるのかなというのを中村先生から学びました。

松木 : ありがとうございます。

藤田 : すみません、長くなりました。

鏑木 : いえ。

《継承するだけでは十分ではない。 自分のプラスアルファを》

武内 : 僕、ちょっといいですか。

鏑木 : どうぞ。

武内 : 岡本さんに、ちょっと。

何かすごいいろいろ書いてて、これからのことをすごい考えた質問シートだなあというふうに家で見て感じたんですけど。その中で中村先生を伝えるときに大事にしたいっていうところで、本当に尊敬できるもの、実際に岡本さんも選ばれてっていうところでいろんな本を読まれたんだらうなって感じたんですけど、「それを継承するだけでは十分ではない気がする」っていうところなんですけど、僕も近い考えのところがあって、岡本さんがどういうふうにその辺を考えているのかなって、もしあったら教えていただきたいなと思います。



岡本 : はい。中村先生の、生前、活動する時のことっていうのは、本当にここに書いてあるように尊敬できるもので、自分にとっても。先ほど、座標軸っていう言葉が出てきたと思うんですけど、自分にとっての座標軸みたいな感じになってきたものだったと思うんですけど、じゃあ、中村先生の言葉や活動だけを伝えていけば、それが中村先生が望まれてたことなのかなっていうふうに疑問に感じるようになってきて。逆に中村先生の、例えばその座標軸でものごと、いろんな、例えば今のロシアとウクライナの問題であったりとかも考えられるようにしなきゃいけないのかなとは思ったりっていうふうに、何かそんな気がして。

じゃあ、本を読んだりして、功績や言葉について知っていくっていうのもすごい重要なことだと思うんですけど、それをプラスアルファで、どういうふうにして展開していけばいいのかなっていうことは自分で疑問に感じているところ、という意味で書きました。

武内 : ありがとうございます。僕も今、社会科研究委員会っていうのに入っているんですけど、そこでも中村哲さんの授業を発表させてもらって、教材とかを、福岡市の先生とかと一緒にしていく中で、伝えるだけじゃないっていう。やっぱり僕たち社会科の小学校の社会科研究の中で考えているのは、未来を担う子どもたちの未来志向っていうところを育てていこうっていうのを一番重きに置いていて。その中でもやっぱりいかに「自分ごと」に落としていくかっていうところで、先ほど、高校のことで「自分たちのしていることがうまく伝わらない」っておっしゃってたんですけど、僕はもうそういう活動をしているだけでも、もう、1人、2人、3人と自分ごととして活動されている方がいる。もっと広げたいと思ったときに、伝える中に、さっき言った、自分のプラスアルファじゃないですけど、プラスアルファの活動が聞いている側にとってすごく魅力的であれば広がっていくのかなと思って、僕も教えるときにすごくそれを気を付けていて。

今回、ペシャワール会の会員になりたいと思って資料もいただいていたんですけど、春吉小学校にいる間に僕がペシャワール会に入って、それが、入ってるからそういうふうに広まってるのか伝えてるってなったらいやなので、もし入るのなら春吉を出て。来年度はまだ春吉にいることになったので、春吉を出てから入会して何かしたいなと思ってたんですけど、やっぱり、先ほど岡本さんが言われた、継承する、伝えるだけじゃなくて、プラスアルファのことがやっぱり人々にとって何かすごい魅力だなって思ったら、いろんな人が来てくるのかなと思いました。ありがとうございます。

藤田 : でも、武内先生…、明日交通事故に遭ったら、もう会員になれませんよ。

(一同：笑い声)

武内 : そうですね、確かに。

藤田 : こんなこと言ったらちょっとあれですけど、中村先生はいつも「生」も見つめておりましたが、「死」も見つめておりました。なのでいつも、自分がいなくなったらどうするかとか。

私が赴任した当初は、日本から女性のお医者さんと一緒だったんですけど、結局現地のことをよく把

握してないので、一所懸命働いたんです。あるとき中村先生が日本から帰ってこられて、その姿を、私も一緒に働いていた方も何も不思議にも思わなくて、とにかく一所懸命働いたの、患者さんのためにも。中村先生が帰ってこられて、この私たちをすごく頭ごなしに怒鳴ったんですよ。それは、もう忘れもしないんですけど、「あんたたちが主役じゃないぞ！」っておっしゃったんですね。そんなふうに言われて気が付いたら、私たちが全部仕事をしてしまうものですから、現地のメディカルワーカーたちも、例えば、ハンセン病の患者さんの脚の傷の手当をすとか、それを遠巻きに、何かいすに座って見ているという感じ。でも私たちはとにかく慣れない所で一生懸命やらなきゃって思ってこんなやってたんですね。そしたら、自分（中村先生）も外国人であると。「あんたたちも外国人で、いずれはここを去るんだから、彼らがやれる方法で仕事を進めてくれ」って言われて。いつも、この、そのときはだから 1990 年時代ですね。

いつも「生」も真剣に考えてありましたが、この、「死」という。自分がここからいなくなるっていうのも考えてあったので、武内先生…、早く会員にならないといけません。（一同：笑い声）

武内 : そうですね。もう明日死んでしまう可能性もあるのか。ありがとうございます。
早く会員になります。大事に取っておきます。

藤田 : そんなところですね。

《中村哲さんについて教える—小学校の授業》

松木 : 武内さんにちょっとお伺いしたいんですけど、授業でどのように中村さんのことを取りあげて小学生の子たちに伝えたりとか考えさせたりっていうのはどのように授業で取り扱ってきたのかなっていうのが気になるんですけど。

藤田 : 私も聞きたかったです。

武内 : 最初言った道徳科で言ったら、気持ちの面で。結構、中村哲さんのことを教えるときに、道徳性っていうか、そっち側が強くなっていくところがあって。ただ、それを質問シートの中にどれくらい出すか、抑えるかっていうのは、僕自身でコントロールは全くしてなくて。（「道徳性」が）出ようが、その中で押さえられようが、子どもたちが「これ」っていう何か一つ見つけたことに価値があるな、そう思っている。社会科に落としていくときに、一番大切だなって教えるときに思ったのは、「事実」と「解釈」を分ける。どうしても解釈メインになってしまうと、自分がどう思ったか、道徳性が強くなってしまって、それこそ思想を教えるっていう。僕がこの立場じゃなければ大丈夫だと思うんですけど、どうしても社会科で入れていこうってなったときには、事実を自分がどう解釈していくかってなったときに、子どもたちが思考の広がりとか深まりが出てくるんだって自分は感じているので、事実と解釈を分けるっていうことですかね。

あとは、最終的に自分ごと。さっき言った自分ごとじゃないけど、じゃあ自分たちで何ができるのか



っていうところに落とし込む授業を中村哲さんの場合は、今回はさせてもらったんですけど。今回、昨年と今年、2年間させていただいて一番の違いは、前時に中村哲さんの授業につながる学習を入れたか入れなかったかっていうところで。去年は入れずに中村哲さんをやったんですけど、今年度は中村哲さんの前に違う学習を入れてやったんですよ。それは、中村哲さんがさっき等身大って言葉が出たんですけど、やっぱ、遠い存在。去年は、偉人だったみたいな授業になったんです。

それをどうしたら自分が子どもたちに近い距離、近くなればなるほど子どもたち、自分たちにもできるかもしれないって思うので、前時に、世界が身近に感じられるところないかなっていうので、吉塚市場リトルアジアマーケット。国が3000万円くらい補助金を出してリトルアジアを作っていこうっていう。もう廃れちゃったんですけど、そこから今、再生していつている。そこを取り扱う中で共生社会とか多様性を目指している人たちがこんなに近くにいるんだって取材を子どもたちが実際にして。で、哲さんに入っていったんですけど。やっぱ一番気を付けているのは事実と解釈。そしていかに「近い存在」として子どもたちが感じ取れるかどうかっていう授業を常に、何の授業もそうなんですけれど。算数とかもそうで、何かただ単に、はい、じゃあ何リトルとかじゃなくて、実際に実物を見て楽しむ中で、これってなんで？という疑問を持たせることによって子どもたちが、「なんでやろ？」て、もっと知りたいって思うような学習にしていくことを心掛けています。

すみません、長くなりました。

松木 : ありがとうございます。

寺田 : 重ねてお聞きしたいんですけど、その授業をやられた後の子どもたちの反応とかってというのは、1年目、2年目との違いであったりとか、ちょっとお聞きしたいんですけども。

武内 : 1年目も2年目も、卒業文集に尊敬する人、誰ですかっていう項目を子どもたち自身が作ったりするんですけど、中村哲さんって書く子がやっぱり数人いるっていうのと、違ったところでも何か書かせたときに、将来自分がどんな人になりたいかっていうときに、やっぱ中村哲さんの言葉が出てくるんですね。「困っている人がいたら僕はすぐ助けたい」とかですね。やっぱ子どもたち自身にも、それぞれ捉え方は違うけど、1年目と2年目の大きな変化っていうのは、先ほど言った、偉人として捉えているか、自分たちにもできるって思って捉えているかの違いで。

ただ、すごく子どもたちは、じゃあ自分にとって何ができるのかなって思ったときに、電気を消すでもいいんですよね。未来を考えるときに。さっき、多角的って岡本さんが書かれてたけど、その出来事をいろんな視点から見るっていうのもそうだし、中村哲さんの業績を見たときに、ただ政治面だけじゃなくて、多面的じゃないですけど、じゃあ環境面からも見てみようっていうようなそんな姿も子どもたちから見られたなって感じています。以上でございます。

寺田 : ありがとうございます。

武内 : 難しかったんですが、一番は、やっぱり、何か楽しいとか、何か魅力。



さっき、最初の先生が（なりたい職業）ランク外じゃないですけど、それってすごい悲しいなと思って。自分もめっちゃめっちゃ疲弊しているんですよ。毎日帰って、それこそ12月3日に授業させていただいたものの、2学期とかも死にそうなくらい。もう毎日、過呼吸になるんじゃないかっていうくらい。それは冗談なんですけど。本当、苦しかったりとか、毎日毎日分単位で、きょう、ここまで絶対終わらせないかん。じゃあそのためにこの資料を作ってこんなんしてとかって、めっちゃめっちゃ頭フル回転で、頭おかしくなるんじゃないかなって。本当に、頭おかしくなるんじゃないかなって。でも、未来を担う人たちが魅力的に映らない、教師が。中村哲さんもそうだと思うんですけど、魅力的に映ったからこっだけ広まった。何か、今、有名な方とか芸能人とかもそうじゃないですか。結局、魅力的に映ったから、その人がどんどんと輝いていく。何かその魅力的に映る人に自分がまずならないといけないなっていうので、最近はですね、何か、格好つけるようになってます。（一同：笑い声）

きょうも一番お気に入りの香水付けてます。こんな先生いていいんだっていいですか。

藤田 : うん。

武内 : すみません。

藤田 : いえ。

鎌木 : なるほど、かっこいいです。

武内 : ありがとうございます。

《死に直面する中で―「人生何があるか分からん」、自分は何をするか》

鎌木 : ちょっと頭の中で少し引っかかっていることが少し解かれようとしていると言いますか、「あんたたちが主演ではない」、現地ではまさにそうだと思うんです。そして、例えば日本で、戻ってきたとき、ペシャワール会に「先生のお仕事を見てとても感動させられます」って言うことはほとんどナンセンスですよ、ペシャワール会の働きにとっては。それよりは、ペシャワール会に何も言わなくて入会して、現地の活動で使える寄付金をしたほうが意味があると言いますか。

藤田 : はい。

鎌木 : そうですね。（一同：笑い声）

藤田 : 確かにそれはそうです。

鎌木 : その辺りっていうか、こういう活動とか、僕も授業（中村哲記念講座）とかやってて思うのは、



結局何かそういう、何の意味があるのかっていう。ペシャワール会の活動、現地の活動に関わるこの意味っていうものもあると思います。もちろんそれが中心だと思うのですが、それを離れてそのスピリットを継承するといったときに、何というんでしょう、「感動しました！」ではちょっと薄すぎるんですけども、それをもって自分が新しい何かをやるとか、さっきの、継承することの意味プラスアルファの部分なんですけれども、何か始めるっていうことがあり得ると思うんですよ。それはまたペシャワール会そのものの活動とは違うけれども、だけどそのスピリットを継承することで始まる何かっていうものも、あると思うんです。

何かそういう広がりというものを、考えられたらいいのかな、と。ただ、その際にやっぱり軸にある中村先生のされたお仕事の意味って言ったらいいでしょうか、それはきちんと受け止めて。で、明日死んじゃうかもしれないので、というようなことも思いながら、ちょっと、今、何かがこう…、つまりは同じことの繰り返しなんです。要するに「中村哲先生に関わるってどういうことなんだろうか」ということを考えさせられるんですよ。確かにもったいなかったと思うんです。ただ、僕とすると、僕が話を、時間取っちゃったら、他の人が話せないじゃないですか。何か他の人と話をしていたので。僕は僕なりに先生の言葉をいろいろ何か受け止めて、自分なりの何かをしていこうとかって考えてたんですね。

藤田 : あっ、はい。(一同：笑い声)

鏑木 : いや、すみません、何か、あの。

藤田 : いえ。

鏑木 : 何を言いたいのか分かんなくなっちゃってるんですが、結局、意味のあること、継承して何かする意味のあることっていうのは、何か、そこ、もうちょっと僕もお話聞いて考えたいなっていうふうに思いました。

藤田 : いや、私もさっき、ちょっと言葉足らずだったんですけども、よく中村先生と話してたのは、(みなさんは) まだ20代ですよ？ 私も…

学生たち : 10代。(一同：笑い声)

藤田 : ごめんなさい、間違えた。失礼しました。

私が30代の頃、よく先生と話をしていたのは、中村先生はとにかく、困ってる人がいたら放っておけないという性質。性質というか、それで済ませていいのか分からないけど、そんな感じだったので、とにかくそれを察知すること。それから、どうやったらいいのかということ次から次に展開していかれるという中で、よく話していたのは、「人生何が分かるん」と。本当に何が分かるんではないですよ。先生がまさかあのときに死ぬなんて私たちもちっとも思ってなかったし、もう、「人生何が分かるん」と。「その中で自分が何か人のためにできることっていうのは少ない」というよう



な話をよくしていました。私はそれがずっともう、そういう話をしていた頃から、日本に帰ってきても現地にいても、とにかく自分に与えられた何か。この言葉もいやなんですけど、何か役に立てるっていうものが身に付いたら、すぐ行動しなきゃと思うようになりました。

當眞：(座談会の残り時間あと5分を知らせるアナウンス)

藤田：例えば、紙くずが落ちてるとかいうときに、例えば、バス、電車に乗ってたりしたときに、お年寄りが乗ってきたときとか、荷物をたくさん持つて人が乗ってきたときに席を譲る、割と勇気のいることですよね。でもそんなときに、もう、迷うことなく、あ、おばあちゃまに座っていただくとか、そんなことを。格好つけるんじゃなくて、もう、この時間が。

きみに与えられた時間っていうのは誰も分からない。もしかしたら明日、何か病気になってしまうかもしれない。その自分が置かれた中で何か役に立つことが自分が気が付いたらすぐしなきゃ、とかね、そういうこともよく中村先生と話していました。それで先生は突っ走るわけですよ。私たちは後ろからこうやって、ハアハア言いながらついてくるという…。そういうのを先生に教えてもらったというか、すごくいいというか、自分がこのどこでも生活する中で自分がどうありたいかっていう、そうカタイものじゃないんですけれども、どうにかそういうことって自分の人生であんまり遭遇することはないんじゃないかと。だから一つ一つが貴重な遭遇であって、そのときに何か自分がさっと動けるような自分でありたいなというのは。いつも動けてるわけじゃないけれども、そういうのは気を付けるというか、自分がどうありたいかで、そうしておきたいなというのは中村先生から学んだ大きなことかな。だから大きなことやないんですよ。

中村先生が言ってたのは、日本で年老いた母親がいてとか父親がいてとか、誰か兄弟で病気の人がいて、そういう人を手厚くお世話している。そのことはニュースにもならないけれども、そういう人が自分は英雄だと思うって。たまたま自分はこのアフガニスタンに関わっててニュースに出たりするけれども、そういう人はいっぱいいて、そういう人こそが英雄だと思うって言ってたんです。なのでそういう中村先生を私は好きでした、はい。いばってないし。

鐘木：岡本くん。

岡本：さっきの、藤田さんが、「主役じゃない」という言葉。いくつか前のところにあったと思うんですけど。僕が言葉の選定のときに気になった言葉で、「『いい経験になった』などというセリフは止せ、要するにきみらのロマンや満足のために仕事があるのではない。ともかく結果を出せ」。(注8) 言ってる意味はちょっと違うかも分からないけれども、この言葉がすごく印象に残ってて。僕もそれまで、国際協力とか国際支援とか何か大まかなキラキラしたものにすごく何か憧れを抱いていて、その憧れが何かいい意味で幻滅したというようなことがあって。思い出したときに自分も、じゃあ、目の前に困っている人がいたらすぐ助けてきたのかなって思った

*注8:『医者、用水路を拓く』p177 (2007.11、石風社)



ら、全然やってなかったなって、すごく自分に失望したっていうような思いがあって。今さっきの藤田さんのお言葉を聞いて、じゃあ、何かニュースにもならないような例えば小さなことでも、すごく、やるのが、自分にとっての中村哲先生の思いや言葉を知る、プラスアルファになるのかなっていうふうに感じました。すみません、質問でもないですけど。

藤田 : いえ。何か、「いい経験になりました」っていう、そこは、私たちは、カチンカチン来ながら中村先生と話してたんですけど、現地は、それだから、私たち、中村先生が活動を始めてるわけなんだけど、結構、この「死」と、例えば、ペシャワールですと、アフガン難民が難民キャンプに何十万と住んでいると。すごく劣悪な環境で住んでて。こっちはすごく、「日本から手伝いに来ました！」とか言って張りきって来る人もいっぱいいました。

眞 眞 : (グループでの座談の終了を知らせるアナウンス)

藤田 : その中で、もう現地はいやだと思って帰る人もいます。それを非難するんじゃなくて、そのときに、「いい経験をさせていただきました」って言われると、こっち側はもう「死」に直面している人達をいっぱい見ているわけですよ。その中でその言葉があると、すごく、そういう言葉になるわけです。あんたたちの経験のために私たちはここで仕事してるんじゃないってなる。

だからああいうときはもう、いずれあなたたちもそういうことがあったりしたら本当にそういう言葉は発しないで、自分の心の中で何かを感じながら。挫折も大事だと思うんですね、挫折。自分は環境には合わなかったっていう、そのことを経験するのも大事なことなので、もう何も言わないで「ありがとうございました」って言って帰ってもらったほうが、私たちは穏やかでおれたんです。その話はよく中村先生とやって。あの、何か生々しいですか。

眞 眞 : はい。ということであつという間でしたが、プログラムの都合上、座談会はここまで。

眞 眞 : 全体でまた座談の時間がありますので。

眞 眞 : ええ。

眞 眞 : なんか本当につらいですね。もう終わりって言いたくないなっていう感じがしましたけれども。

眞 眞 : 皆さん、本当にありがとうございました。それではまた全体の流れに入っていきます。

眞 眞 : ありがとうございます。おつかれさまです。

(了)



座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	藤田千代子（ふじたちよこ） PMS 支援室長 ペシャワール会理事 元現地ワーカー
専門・仕事	看護師。日本での病院勤務を経てパキスタン・ペシャワールの中村哲医師の活動へ参加し、現在に至る。
中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？	
共に働いた。 中村哲先生の講演会。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
目の前に困難が立ちただかっても、足踏みをしてゆっくり歩いたり、回り道をしたりして時を待てばよい。とにかく一生懸命力を尽くせば、たとえ失敗しても神様は許して下さるだろう。気がつかないだけで、私たちのまわりには恵みが備えられている。失っちゃいけないもの、医療人では思いやり。非難の合唱に加わらない。異文化のなかでちょっとした違いを自分の物差しで、優劣をつけたり、進んでいる遅れていると決めつけないように。等々	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
たいへん楽天的なところがある。現地活動である地点にたどりつくまでたいへんな苦勞をして嘆いたりしても、結果を出し次にとりかかる時にはいつも「ここから先は楽勝だ」と、とても明るく、しかし再度同じような苦勞をするのだが。これの繰り返しで医療や用水路は進められた。決してあきらめることはなかった。謙虚なところ。神を恐れる。物忘れと勘違いが激しい。同じことを何度も何度も話す。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
困っている人を前に、何が困っているのか何が必要か、何をすべきかを見極め出来ることから実践する人である事を伝えたい。一方で失敗もたくさんあり普通の人ということも。	
その他	中村先生を知る人生と同時に知らないで人生を送ることも大いにあり得ますが、この九大プロジェクトで中村先生の事が次世代に継承されていくなかで、出来るだけ多くの方が”知る人生”を送られることを願っています。九大のご担当の方々のご努力に感謝致します。

	佐々木 亮（ささき りょう） 朝日新聞社 新聞記者
中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？	
取材。2001年9月17日、福岡空港で初めて取材しました	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
「座標軸」あるいは「北極星」のような存在です	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
「もし道に倒れている人がいたら手を差し伸べる。それは普通のことです」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
決して「聖人君主」ではない人間味、だからこそその素朴な正義感。	

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
大事なことは何度でも書いて伝えたいと考えてきました。	
一方で、新聞の紙幅の制約から、書き切れない、載せきれないことがありました。	
(報道関係の方へ) 国際情勢が変動する中、中村哲先生の活動や価値観には変化はあったのでしょうか？*	
あくまで私見ですが、私が取材をはじめた当初、中村さんはある意味「孤高」の存在でしたが、次第にアフガニスタン政府や国連、JICAとも協働を探るようになっていったと思います。	
その他	こうした活動を九大を拠点に、他校・他地域・他国の若い人たちも能動的に関われるように広げていってください。

	武内 巖太 (たけうち げんた) 春吉小学校教諭 (社会科)
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
5年前。 校区に PMS 事務所があり、中村哲先生をピックアップさせていただき、授業を公開。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
シンプルに生き方がかっこよく、中村哲先生のようにかっこよく生きたいと思った。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
希望を守り育てるべき 誰も行かぬなら 我々が行く	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
中村哲先生のもつエネルギーの源とは	
中村哲先生の行動から見る心の在り方	
中村哲先生のように信念を貫くだけの想いと力をつけ、大胆な発言を国会の場面などでも真っ直ぐな目と心で伝えることのできる人が今の社会であまりいないと思う。そんな人を今の社会だからこそ、無意識的に憧れ、求めているのではないかと思う。今のジェンダーフリーの社会でこの言葉が適切かどうかは分かりませんが、僕は、生物学的に男と自分自身で認識している者の奥底にある強くありたいと思う本能をくすぐられる。一言で言うと、過去から存在する強さと現代で必要な思いやる心のハイブリッド、そして、チャーミングな人柄が、今みなから注目を集める理由ではないかと考える。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
事実と解釈を分けること。	
(先生方へ) 中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか？*	
小6年生の社会科教科書に国際理解の大きな単元が2つあります！その中で、国際社会の仕組みを知るだけでは、学びは深まりません。自分ごととして考えるために、例えば前単元で身近な場所で共生社会を目指している所、僕は吉塚市場リトルアジアマーケットの目指す姿などをピックアップし、教材化し、そこから真の共生社会とは何かを学ぶことをはじめにしました。要するに、言葉(教えたいこと)と子どもとの距離やギャップをいかに縮めてあげた上で、中村哲先生の授業をすることだと考えます。そうすることで、思想だけでなく、根拠や事実をもとに自分の解釈から、学びをより広げ、深めることができると考えます。	





坂本雄哉（さかもと ゆうや） 福岡高校2年 ペシャワール班

中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？

約2年前ニュースで見て。中村先生の通っていた母校で活動している

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

物事の見方

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

百の診療所より一本の用水路

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

現地の人々との接し方。中村先生がどのような意志で活動を行ったか

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなど思っていること

現地の人々を第一に考えていたこと

(高校生・大学生へ) 中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*

現地の人々と接してどのように考えが変わったか



松木沙和（まつきさわ） 福岡高校2年 ペシャワール班

中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？

去年の春頃。

中村哲先生の母校である福岡高校に通っていること

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

生徒会の活動などをする中でどのような精神を大事にして、仲間と協力して行っていけば良いのか影響を受けた

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

信頼は一朝にして築かれるものではない。利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが人々の心に触れる。

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

中村先生が残されてきた言葉一つ一つに込められた思い

(高校生・大学生へ) 中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*

現地で働いている様子について、中村哲先生の国際協力のあり方についての考え



岡本偉吹（おかもと いぶき）九州大学共創学部2年 哲縁会

専門・仕事 民主主義の持続可能な発展の仕方

中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？

亡くなられた際。読書やメディアを通して、こちらが一方向的に存じ上げているのみです。

(中村哲医師メモリアルアーカイブの言葉の選定に参加)



中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？
国際情勢を見る目をより多角的にしてくださったと思う
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？
環境問題を論じる際の発言について『環境問題』という語の響きは、目前の早魃を見てきた者にとって、いくぶん生ぬるい。このアフガニスタンという世界の片隅だけで、既に数百万人の人々が生存する空間を失っているのである。」図書館に掲示されてあるものです。
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい
命への向き合い方
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
彼の生前の功績や言葉は、本当に尊敬できるものだが、それを継承するだけでは十分でない気がする

	寺田愛理（てらだあいり）九州大学大学院修士1年 想いを繋ぐ会/哲縁会
専門・仕事	専攻は森林計画学で、森林管理について学んでいます。学生団体に所属し、地域活動を行っています。将来は、森林に関わる仕事をしながら、地域活動を継続していきたいです。

	鐺木政彦（かぶらぎまさひこ）九州大学教授（政治思想史） 中村哲記念講座担当
専門・仕事	大学教員として、大学運営、学生の教育、研究をしています。大学運営では、この3月にはじめて卒業生を送り出す共創学部の学部長としての仕事や、全学の教育に関して教育担当の理事の補佐のような仕事をしています。学生の教育では、学部（共創学部）と大学院（地球社会統合科学府）の担当教員として、授業、ゼミ（少人数での講読）、論文指導を行っています。研究では、政治思想史という分野を専門としています。西洋世界が世界を支配していく19世紀から20世紀前半までの時代を対象に、遅れて近代化を果たしたドイツや日本に登場した近代批判の思想（ニーチェや和辻哲郎など）を読みながら、近代社会を生きる人間（個人と共同体の両面）の課題を掘り起こし、それに対してどう向き合うべきかを考えてきました。
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	『天、共に在り』の中に書かれている少年期のエピソード。大病で意識を失い、回復した後に読んだ絵本に出てきた「白髭の古老」が幻視のように現れ、対話を繰り返したという経験（42頁）。「天、共に在り」「神聖なる空白」という中村哲医師の言葉がどんな経験から生み出されてきたのか、考えさせられる。
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	政治との関係。中村医師の発言と行動は、政治的な立場の違いを超えた意味をもつ。だが世界の現実の中でそれは、何らかの政治的な意味をもつことになる。中村医師の言葉や行動を、いずれかの政治的立場や国の政策を批判したり、支持するために用いるのではなく、政治とは何かを根源的に反省できるような仕方で伝えたいと考えている。

(先生方へ) 中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか？*

政治と同様に、中村哲医師の考えや行動を道徳から切り離すことはできないと思う。ただ、何らかの道徳的メッセージを発するためにその思想や行動を語ることには、慎重でありたいと思う。それは政治的立場のために中村医師の言葉や行動を引用したくないと思うのと同様である。大切なことは、中村哲医師の言葉と行動、およびそれらが発言され実行されたコンテキストを正確に伝えることだと思う。そこからどのようなメッセージを汲み取るかは、聴く側に委ねたいと思う。

